国際と国内をつなぐ

－国際協力とソーシャルワークの壁を乗り越えるために－

地域をつなぐオフィス　ソーシャル・コーディネーター
小松豊明

自己紹介

2001～2024　特定非営利活動法人シャプラニール＝市民による海外協力の会

- フェアトレード（フェアトレードタウン認定委員会副委員長）
- 開発事業・ネパール事務所長（農村開発／児童労働／初等教育の普及／防災・減災　など）
- 災害復興支援（インド洋大津波／ネパール大地震／東日本大震災／西日本豪雨など）
- 事務局長（JANIC副理事長）

2024～現在　社会福祉法人雲柱社　小平市子ども家庭支援センター（虐待対策ワーカー）

地域をつなぐオフィス
https://komatsunagu.localinfo.jp/

ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科社会福祉学専攻博士後期課程

シャプラニールでの活動

ミッション：
すべての人々がもつ豊かな可能性が開花する社会を実現する

大切にする価値観：
- 援助をしない　問題の根本的な解決をめざす
- 自らの解決を促す　当事者主体／エンパワメント
- みんなで考える　地域や社会を巻き込む
- 現場から学ぶ　現場の視点から発信する
- 誰も取り残さない　取り残された人々や地域、課題を優先する

家事使用人として働く少女の権利を守る（バングラデシュ）

【問題の背景】家事使用人として働く少女が数十万人。閉ざされた室内で働くことを強いられ、教育の機会、子どもの権利を奪われている。

【活動の目標】

① 子どもたちが本来持っている権利を享受する　② 家事使用人として働く少女が減る

【活動内容】

支援センターの運営：ベンガル語や英語などの読み書き、計算などの学習機会を提供。性暴力をいかに防ぐかを学ぶ性教育、絵や歌・踊りなどを楽しむレクリエーション、運動会や文化祭など。

雇い主や親への取り組み：雇い主や親に対し、子どもの権利に関するワークショップを開催、児童労働による弊害や教育の大切さを伝える。

地域社会への取り組み：地域住民の理解促進、支援センターを自主的に運営できるように働きかける。

バングラデシュ社会に対する取り組み：シンポジウムの開催、NGO、国際機関、各省庁とのネットワーク構築。新聞やテレビなどメディアを通じた意識啓発

行政への働きかけ：家事使用人保護および福祉政策のが法制化、労働雇用省大臣との話し合いの場づくりなど、行政へのアドボカシー

洪水による被害を軽減し暮らしを守る（ネパール）

【問題の背景】

ネパール南部の平野部では、ほぼ毎年雨期の大雨による洪水被害が発生。地域ごとに「災害管理委員会」の設置が義務づけられているが、十分機能していない

【活動の目標】

住民の防災意識を高め、自ら防災活動に取り組むようになる

【活動内容】

住民との取り組み：コミュニティの災害管理委員会を中心に、洪水発生に備えた緊急連絡網の整備や、避難訓練を実施。洪水リスクのある場所や避難場所の把握のためにハザードマップを作成。洪水対策インフラ（堤防、川横断通路、排水設備）の維持管理の仕組みをつくる

行政との取り組み：行政関係者を対象としたワークショップや研修、先行事業地の河川での視察を行うことによる行政の防災能力強化。行政と住民が連携して洪水防災に取り組むよう、予算措置の要望など。

企業との協働

日本の斜面防災専門コンサルタント企業の協力を経て、事業地の定期的視察、設計図や施工状況について助言を受ける。

ソーシャルワーク・社会福祉との出会い

東日本大震災の被災地復興支援

発生直後から福島県・いわき市を拠点に被災地支援活動を担当。現地の社会福祉協議会やNPOとの協働による支援活動を展開。

日本の社会福祉制度やソーシャルワークの実践を垣間見、自分がそれまで社会福祉という領域に全く無知であることに気が付いた。

同時に、自分たちが途上国において日々行っている貧困課題の解決や子どもの権利保護といった国際開発事業に相当する活動は日本で誰がどのように行っているのかを考えるように。

⇒日本における社会福祉の経験の蓄積から多くのことを学ぶことができるのではないかと考え、社会福祉に関する勉強を始め、2017年に社会福祉士の資格を取得。

国際開発とソーシャルワークのギャップと接点

国際開発とソーシャルワークのギャップ

国際開発とソーシャルワークの交流についての議論はあまりなく、研究課題としても、まだ体系的に確立されていない(Daniela Gaba, *Interaction between Social Work and International Development: Specific Points of Connection*, 2016)

JICA(国際協力機構)が支援した途上国の保健医療プロジェクトのレビュー調査(2000年から2006年)で、社会福祉の介入を必要とする個人や家族を直接の対象としたプロジェクトは60件中8件(13%)に過ぎなかった。理由の第1は国際協力の世界では社会福祉支援は他分野に比べ優先順位が低いこと。第2に社会福祉的介入を遂行できる専門家が少ないことが挙げられる。(明石留美子, *ミレニアム開発目標とソーシャルワーク実践*, 2010)

先進国の国際NGOはソーシャルワーク領域と同様のスキル・知識を用いているが、自身をソーシャルワークもしくは社会福祉機関であるとは必ずしも認識していない。その理由は、先進国におけるソーシャルワークは国際領域を対象としてこなかったため(原島博, *"誰一人取り残さない" 国際ソーシャルワークと国際協力*, 2020)

ソーシャルワーカーとして「障害と開発」分野における活動に携わった経験から、国際協力・開発分野においてソーシャルワークの価値と意義についての理解はまだまだ浅い(盛上真美, *国際協力におけるソーシャルワーカーの役割と課題*, 2018)

国際開発とソーシャルワークの接点

Gabaの分析：両者の学際的な結びつきは強く、それぞれの活動内容も複数の分野でオーバーラップしている（貧困、健康、ジェンダー、環境、協力、教育）

理論的・手法的レベル	実践的・専門的レベル	倫理的・道徳的レベル
・国際ソーシャルワークは、国際開発とのさらなる交流を通じて、もっとクリアにその輪郭を描くことができる ・国際開発とソーシャルワークには、非常に強い学際的な結びつきがある ・いずれも革新的な実践に焦点を当てている	・ソーシャルワーカーの活動は一定の範囲で国際開発専門職の活動とオーバーラップしている ・「コミュニティ」が国際開発、ソーシャルワーク両方の焦点となっている	・ほとんど同じ価値観を基本としている ・ソーシャルワークは人権に強く焦点を当てている

国際開発とソーシャルワークの接点　ー価値観

ソーシャルワーク専門職のグローバル定義およびその注釈の内容と、ODA拠出額上位5カ国（アメリカ、ドイツ、日本、イギリス、フランス）のODA実施機関および国際NGOのネットワーク組織が公表している憲章やビジョン・ミッションの内容を比較。複数の組織に共通点が見られたのは以下の通り。

グローバル定義のキーワード	ODA実施機関	NGOネットワーク
社会変革	私たちは変化を実現する。パートナーと共に包括的に取り組み、大規模な事業を実施し、目的を達成するために責任を共有する（GIZ） 開発途上国の社会全体のトランジションを支援する（JICA） 全ての国は、環境への負荷の最小化と人間開発指数の最大化によって特徴づけられる世界への変革に向けて進まなければならない（AFD）	社会の制度や人々の意識といった社会システムの変革に積極的に取り組む（JANIC） 人道支援や人権擁護、持続可能な開発のための変革や教育に全力で参加する（VENRO）
人々のエンパワメントと解放	私たちは、周縁化され脆弱な人々の声を強化するよう努力する。誰もがそれぞれが持つ可能性を確実に実現できるよう取り組む（USAID） 人々が自らの開発プロセスを形作ることができるようにエンパワーする（GIZ）	現地の人々が問題解決や意思決定に主体的にかかわることを尊重する（JANIC） 個々人の人生と尊厳を高められるよう、自立、自助、参加、そして持続可能な開発を促進する（InterAction） 地域主導とは、不平等な権力構造を明らかにし、私たちが支援する人々が自分自身で決定することができるようにすることである（Bond）
人権	私たちは、人権、平等な機会、そして道徳的な信頼性を尊重する（GIZ） 基本的人権を尊重するとともに、ジェンダー平等を含むダイバーシティ・エクイティ＆インクルージョンを推進する（JICA）	活動対象地域・個人の人権を最大限尊重する（JANIC） 極度の貧困を撲滅すること、人権と市民参加を強化すること、持続可能な地球を守ること、平和を守ること、そして全ての人々の尊厳を確実にすることを地球規模で追い求める（InterAction） ジェンダー平等や包摂、人権や子どもの権利の実現を通じ、構造的あるいは個人的な差別を解消するための取り組みを行う（VENRO） 人々や地域の声と権利をそれぞれのアプローチに統合する（Bond）
多様性尊重	世界中のコミュニティで私たちが奉仕する全ての人々、パートナー、ひとり一人を尊重する。私たちは、多様性から来る強さを認識する（USAID） ジェンダー平等を含むダイバーシティ・エクイティ＆インクルージョンを推進する（JICA）	地球環境や多様性に最大限配慮し、持続可能で包摂的な社会の実現を目指す（JANIC） ジェンダー、多様性、障害者の包摂といった課題をそれぞれの事業に統合する／会員の事業において、対象となる人々の尊厳、価値、歴史、宗教、そして文化を尊重する（InterAction）

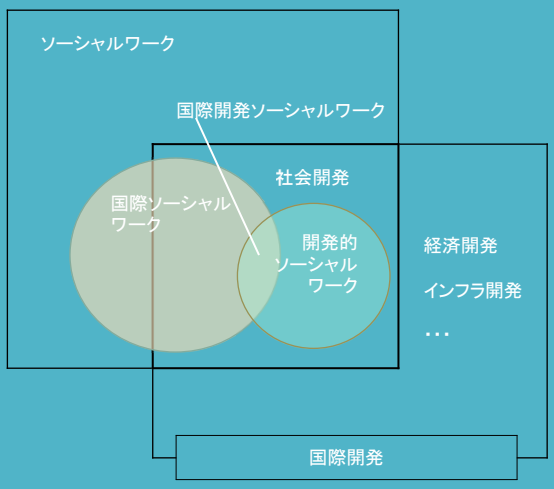
国際ソーシャルワークの定義の比較

	Payneら(2008)	Hugman(2010)	Coxら(2013)	Healey(2021)
国際開発に関連する内容	・「南」において開発組織(NGO等)で働くこと ・国連機関や政府の開発部署で働くこと(ただし、イギリス等ではこれをソーシャルワークとはみなさない)	・国際NGOや国連機関などの国際機関で働くこと	・国際的な状況において、世界的、人権、環境、そして社会開発の視点を統合したアプローチであり、それらに対応することがベースとなる	・ソーシャルワーカーが国際開発組織に雇用され、またはボランティアとして国際的な人道支援や開発事業に取り組むこと ・国際政策開発とアドボカシー
各国内における実践	・国内の難民支援に携わる ・国際養子縁組など国をまたぐ活動を行う組織で働くこと	・ソーシャルワーカーが実践を行っている国以外の国出身の個人や家族を対象とする活動	・その適用を「国際」のみに限定すべきではなく、ローカル、地域、国内、国際、全てのレベルへ適用することが必要	・国際的に関連する各国内の実践とアドボカシー：難民の再定住地支援、在留外国人支援、国際養子縁組、国境地域でのソーシャルワークなど
その他	・ソーシャルワークの国際組織(IFSW、IASSWなど)で働くこと ・国際会議に参加すること ・外国でソーシャルワーカーとして働くこと	・ソーシャルワーカーの出身国以外の国におけるソーシャルワーク実践 ・国境を越えたプロジェクトにおいてソーシャルワーカーが意見交換や協働を行う国際的な連携 ・グローバル化された社会システムに起因する課題を地域で取り組むような実践	・世界の多くの人々のウェルビーイングに深刻な影響を与える世界的な課題に適切かつ効果的に対応できるよう真に統合されたソーシャルワークを実現するため、ソーシャルワーク教育と実践をグローバル及びローカルレベルで提唱する行動	・ソーシャルワークに関する情報や経験を国際的に交換する能力

疑問・・・「(国際)ソーシャルワーカー」とは誰なのか？

隣接する研究分野　ー国際開発とソーシャルワークの重なり

国際開発とソーシャルワークの理論的概念の重なりイメージ



- 社会開発が国際開発とソーシャルワークの接点となっている。
- 開発的ソーシャルワークは社会開発に包含される概念であると同時に、投資戦略を伴う活動である(Midgley, 2010)
- Desai(2014)は、開発的ソーシャルワークと国際ソーシャルワークの結節点として国際開発ソーシャルワークを提唱。実践者自身がそれを国際開発ソーシャルワークとして認識するのか、あるいは誰がそれを国際開発ソーシャルワークとして認識するのか。(東田, 2023)

実践者の声

国際協力NGOや開発援助実施機関の職員、開発コンサルタント等、国際開発に携わるあるいは携わった経験を持つ人の中で、①社会福祉／ソーシャルワーク分野の教育を受けたことがある人、②社会福祉／ソーシャルワーク分野の業務経験がある人、③社会福祉士の資格を取得した人、14人へインタビュー。

国際開発とソーシャルワークのギャップ

大学院に行ったときに国際協力を学び始めて、そこで全然ソーシャルウェルフェアだったりソーシャルワークっていうのは具体的にあんまり入ってこない、もう全く別物としていろんな貧困問題だとかを扱っていて、そこは私の中では違和感はすごく持ったっていうことですね。

ソーシャルワークを学んだことを日本のNGOで学ぼうと思った、活かそうと思ったんですけども、当時やっぱりソーシャルワークとかって、認識、認知あんまりされてなかったのかな、国際協力業界で。

国際的な協力は、元々最初から海外の貧困問題とかっていうところから入っているから、国内の社会福祉で、国内課題だったりとか、制度だったりとか、そういうのを把握していないので、そこをつなげようっていう発想がそもそも生まれずらいのかなっていうのは何となく個人的には感じているところですね。

国際開発とソーシャルワークの共通点

NGOの職員の場合は、社会的弱者、ODAだとなかなかそこまできめ細かいところっていうのはできてないので、社会的弱者の支援っていう、そういうところの想いっていうのは強いんじゃないかなっていうふうに思います。

要は権利擁護だとかネットワーキングとか人材育成とかイコールパートナーシップっていう、そういうことの支援の原理原則っていうものも、同じなのかなっていうふうに思います。

ソーシャルワーク専門職のグローバル定義が、そのまま自分が村落開発でやってきたことを書いてあるなっていっつも思っていてですね、今言った人々のエンパワメントと解放とか、解放を促進するとか、人権とか社会正義、多様性の尊重みたいな、そういうところって自分がやってきた村落開発には欠かせないと思ってるんですよね。

何を学び合えるか　ー広い視野を持つことの大切さ

社会福祉に携わる人たちって、視野がどうしても狭くなるんですね。これもう職業柄しょうがないんですね。一人の子どもとか、そのことを中心に仕事でずっと考えているわけなので。

日本なんかはソーシャルワークに関わる人たちが、個別の目の前の問題でいっぱいになるんですけど、国際的にだともう一個上の枠組みで私たち関わったりするじゃないですか。そこをつなげることでもうちょっと相対的にみることで、今目の前に起こってることの課題解決に対する新しい提案だったりとか、そういうことが生まれてくるっていうメリットはあるんじゃないかなと思ってますね。

これから日本がもっとグローバルになるのかどうかわかりませんけど、いろんな人が入ってきたときに、特にソーシャルワーカーの人たちがわかってなきゃいけないことというか考えておかなきゃいけないこととしては、外国人というか自分たちと違う視点の人たちとか考えたこともないことが常識だった人たちのことをどう理解していくのかみたいなところは、開発の方たちの方が多分わかってらっしゃることだと思うので、そこはソーシャルワーカーの人たちも勉強しなきゃいけないことのような気がします。

何を学び合えるか　ーソーシャルワークから学ぶべきこと

開発分野だと、結局時間で区切られてしまうじゃないですか、どうしても。プロジェクトだと3年間とか5年間とかっていうふうになってしまうので、そこ難しいなってすごく思うんですけど、でもエンパワメントって結局継続していかないとできないことだと思うんですよね。

例えば子ども図書館をつくるって言ったときに、やっぱり子どもの背景だったりとか、いわゆるソーシャルワーク的な要素っていうのを入れる必要があるんじゃないかっていうのを結構漠然とずっと思っていて

開発っていうものがどんどんどんどんこう強くなって、それって本当に恩恵受けれるんだろうかっていう、トリクルダウンの論理っていうのはあくまでも論理で、障害、その子がほんとに障害を持ってるとか、一番脆弱な子どもたちにそこまで恩恵届くのかと

開発の現場ではやっぱり個の視点みたいなのは、ますます入れていけるといいなと思いますけど、それはそれで、開発の現場は開発の現場で、みんなやっぱり仕事を回していくことが大変で、しかもプロジェクトには始まりがあって終わりがあって期限がある

国際開発とソーシャルワークの壁を乗り越えるために

【人材交流、研修、教育に組み込む】

何かのテーマで学び合って、人材の交流ができれば、転職とかっていうこともあるでしょうし、キャリアパスとしてね、お互いに、NGOから福祉に来てもいいし、福祉から頑張って、ああ、面白そうだ、じゃあ自分は英語をもう少し頑張って、じゃあ海外の仕事に行ってみたいとかっていうのもありかなと。特にね、心優しくて人のためになんかしたいって思ってる人は、それはひとつのいい転職のオプションじゃないかなと。

開発側にソーシャルワークの視点についてのそういう気づきが持てる研修ですとか、トレーニング、例えば開発のゼミとかの中に、一コマをもらって、ソーシャルワークのことを話したりとか、その逆でソーシャルワークのコースの方に、国際協力とは何かっていうことを話していく

正直1科目とったところであれなので、同じ学校にソーシャルワークと国際がある場合は、国際の中にソーシャルワークと開発のコースができるといいですね。それが理想ですね。そうすると、国際行きたい人が、今ある国際だけじゃなくて、ソーシャルワーク寄りの国際も選べるっていうのになると、ちょっと変わってくるかな、と。

国際開発とソーシャルワークの壁を乗り越えるために

【開発の現場にもっとソーシャルワーカーを】

ソーシャルワークとしてのポストを見つけるのはまだまだ難しいですよね。そうするとソーシャルワークをマスターまでやった人が、わざわざソーシャルワークじゃないポジションを取りませんよね。ポストを作らせるほどに、入っていかないと難しいんじゃないか。そのために、国際開発にいくためのソーシャルワークという意味で、開発分野で働くソーシャルワークの団体、コンサル会社を作って、そういうところが、仕事を獲ってくることをし始めたらいいんじゃないかなと思うんですけども。

事業立案時のアセスメントとかに、ソーシャルワークをぜひ入れてみてほしいですね。障害と開発プログラムで、学校にエレベーターやスロープを付けて障害児も来れるようにってやるんです。教育のプロジェクトに働きかけるんですけど、そこはもう学校しか見てないんですよ。だけど、車いすすら持ってない田舎の子どもたちが、どうやって学校に来るんだって。そこは教育の分野は見てない。やっぱりソーシャルワークはその人がどういう環境に置かれてるかっていうとこからアセスメントできるし、どういうシステムの中でその人が存在してるかっていうところも見るし、そういう視点が入ってのデザインがやっぱり必要なんじゃないかなと。

国際開発とソーシャルワークの壁を乗り越えるために

【日本の現場で学び合う】

日本の国際協力とか開発学の中に、現場での実践みたいなの、例えば日本の中での現場実践を織り交ぜて考えていくみたいなこととか。やっぱりソーシャルワークの理論的なこととか価値みたいなこととかそういうことは是非国際協力の学問の中に入れていただきたいなあとは思いますね。その中でやっぱり、ケースワークとかグループワークみたいなことって国際協力でも使うでしょうし、それを実践的に、例えば、海外でやらなくても、日本の現場で日本のNGOあるいは社会福祉士さんがいるような現場で実習させてもらう、経験させてもらうみたいなのだと面白いかなとか思ったりもしますね。

【ソーシャルワークの認知度を上げる】

とりあえず少しずつ、私社会福祉勉強してますとかっていうようなことをちょろちょろ言うようになってるんですね。そうやって表現すると、少しは認知度があげられるかなと思って。

国際開発とソーシャルワークの壁を乗り越えるために

－私がやりたいこと－

関心を共有する人たち【特に実践者】と
情報共有、議論の場を作る